非漢字系学生のための中級漢字・語彙教育

——多メディア・多技能的アプローチ——

岡野喜美子

はじめに

非漢字系がほとんどを占める国際部中級レベルの学生にとって漢字学習は越えなければならない高いハードルである。漢字力の有無によってどれほど中級段階の学習が容易であるかそうでないかは，非漢字系アメリカ人学生のなかに中国語のできる中国系学生がいる場合もっともはっきりする。中級（J6 クラス[1]）には，毎年自己申告で100字程度の漢字しか読めない学生も入ってくるうえ，300～400字の漢字は知っていても基本的な漢字熟語・語彙を知らないものもかなりいる。約300字の学習を終えた時点で漢字の入り方と定着が急に悪くなる学生もいる。また，話しことばの学習のみで文章の読み書きをほとんどやってきていないものや日常会話だけは日本人並みの日系あるいは日本人学生が入っていることもある。

一方，国際部で今年度来日後(1991年11月)に行った調査では，初級後期(J5)，初中級（J5A)，中級（J6）の学生の多くが「選択日本語」[2]というクラスがあったら取りたいかという質問に「新聞・雑誌を読むクラスを取りたい」と答えている。これは最近の学生が，実際の漢字力はべつにして，

---

1) 全6クラスのうち，J6は唯一の中級レベルのクラスとして設置してあり，初級クラスや初級の復習から始める初中級レベルのクラスとは教材的にも一線を画している。

2) 普通の「日本語」クラスのほかに，1992年1学期(秋学期)から特定の技能や内容を取り入れた「選択日本語」(聴解，文学，文章表現，敬語，文法など）を設置することになった。

早く新聞・雑誌記事レベルのものを読めるようになりたいという希望と知的関心を持っていること[3]，新聞・雑誌に代表される生の教材，大人の日本語教材を求めていることを示しているものと思われる。筆者は，中級段階の学習の成否は，ほとんど漢字学習の成否にかかっていると言っても過言ではないと思うものである。「中級段階の学習とは漢字・語彙学習である」は極論であるとしても，十分かつ適切な語彙，漢字熟語の知識がなければ中級段階での学習の向上は望めない。

本稿は，国際部の学生を対象とした中級段階の漢字・語彙教育での技能統合[4]の試みと中級段階の教育のあり方について提言を試みるものである。前半は中級段階の漢字・語彙学習にたいする筆者の基本的な考えとそれにもとづく2年半にわたる試行錯誤を交じえた実践の報告およびその分析結果について述べ，後半は1992年秋学期から始まる新カリキュラムのもとでその成果を中級レベルの構築に生かす方策を考究する。

I. 中級クラスの学生の現実と問題点

1) 来日前のインプットの問題

国際部の学生は交換留学生であるため，ほとんどの学生が来日する前アメリカで初級ないしは中級のある段階の日本語教育を受けてくる。交換協定校は60余校にのぼり，したがって学生たちの学習歴——本国での日本語学習の期間，量，質(技能の偏り)など——もさまざまである。

1989年9月にJ6クラスの授業を担当することになったとき，筆者は，来日時の学生に共通の問題点が何であるかを考えてみた。その結果，全般にインプットが非常に少ない学習をしてきている，ということに思い当たった。これは国内，国外を問わず，どこの初級教育についても一般的に言

---

3) これは文化・文学系の学生の減少とも関係があろうが，現実の社会に関するさまざまな最新の情報を日本語で得て，それらについて日本語で話したいという学生が増えていることを示している。

4) R.V. ホワイト「読むことの指導」(参考文献1)参照。

えることではあるが，アメリカの初級段階の教育においては特に顕著である。インプットとアウトプットの比率が極端にいえば1対1であるような教育が行われることが多く，インプットされたことはすべて覚え使えるように要求される代わり，覚えられる範囲内の学習量のみ与えられるのである。また，インプットのなかでも，特に，読み書きのインプットが極端に少ないことが特徴であると言えよう[5]。来日前の初級教育で，漢字交じりの文を読む，書く，といった経験をほとんどもたない学生がかなりいるのが実状である。

2)　中級段階の学習の特色——量と質

1)で述べたアメリカでの初級段階の教育に関連して日本での中級段階の到達目標を数字的にみてみよう。

	学習内容	目標	
		漢字数	語彙数
初級	話しことば中心	400 (300～400)	1,500 (～2,000)
中級	(話しことば) ＋ 書きことば	～1,000 (～1,000)	～6,000 (～5,000/6,000)
上級		1,000～ (～2,000)	6,000～ (～10,000/30,000)

数字のあとの～は「以上」を，数字の前の～は「以内」を示す。
上段の数字は「I 学習段階別教授法 4. 中上級」(参考文献 4)による。
下段の括弧内の数字は北條(参考文献 5)による。

上に見るように中級段階で学習する漢字数，語彙数は初級での数字をはるかに超えている。これによって初級の学習と中級の学習の間にはまず「量」的に大きな差があることが分かる。中級の特色として，第一に学習

5)　アメリカでは現在「話しことば」重視の実用日本語教育が広く行われているが，筆者のアメリカでの聞き取り調査では，初級でさえレベルが上がるにつれ授業時間数が減るため，読み書き教育の重要性を認識しながらもこれを割愛せざるをえないという大学も多かった。岡野喜美子(参考文献 2)および牧野成一(参考文献 3)参照。

量の問題があるということである。さらに新たに書きことばが導入され，さまざまな文体の学習が入り，新語彙のかなりの部分が漢字熟語になるなど，「質」的な差がこれに加わる。読解の学習のウエイトが非常に高くなるからである。非漢字系学習者の場合，これによって中級段階の学習には重い心理的な負担，あるいは過度の期待が起こるのが普通である。経験的にも言えることだが，中級をうまく乗り越えた学生は上級に順調に進むことができるが，話しことば中心の初級学習の成功者が必ずしも中級段階の学習内容，学習量を困難なく受け入れられるわけではないことがこの中級日本語の特色からも分かる。

II. 漢字・語彙学習の目標達成の方法

以上に述べた学生たちのニーズ，および学習の量と質の問題から，授業を始めるにあたって，筆者は下記のような指導方針(と到達目標)を設定した。1から4は初年度のもの，5から8は2年目，3年目に追加したものですべて今年度実践中のものである。

1 体系的・目的的な漢字の導入をする
(新聞などができるだけ早くから読めるようにする)

2 学習漢字1000字を目標とする
(漢字熟語・語彙ができるだけ多く入るようにする)

3 学生が関心を持つ生の教材を読む
(新聞・雑誌記事が読め，時事的な話題に加われるようにする)

4 漢字熟語・語彙を聴解に結びつける
(ラジオ・テレビのニュースが分かるようにする)

5 おもしろい読物を多読する
(読む量——インプット——をできるだけ多くするようにする)

6 学習した漢字熟語・語彙が繰り返し現れるような読物を多読する
(学習漢字熟語・語彙がしっかり定着するようにする)[6]

---

6) 中級段階の語彙の定着などについては川口義一(参考文献6)参照。

7　異なる教材――テープ教材・ビデオ教材・中級読解教材・生教材――で同一あるいは関連トピック，テーマを扱う
(インプットと定着が確実なものになるようにする)

8　学生が各自選んだ記事の内容を口頭で発表させる
(学生中心の読み学習ができ，同時に口頭表現が豊かになるようにする)

5 以下の「インプットと定着をめざした指導」を加えた背景と根拠は次項にみるように初年度の漢字・語彙クラスの反省から生まれたものである。

III. 2年半の実践――反省と評価

筆者は，1年目，中級クラス (J6) の総コマ数5コマ中，他のふたりの教員の担当がそれぞれ精読・文章表現3コマ，プロジェクト・ワーク1コマであったため，1コマだけ担当することになった。2, 3年目は精読・文章表現が2コマ，プロジェクト・ワークが1コマになったので，漢字・語彙学習を中心にすえたクラスを2コマ担当できることになった。継続的な聴解指導が他のクラスにはないので筆者のクラスで行うことになった。以下は2年半にわたる実践の記録と評価である。

A　実践例1――1年目 (1989～90年)

1コマ(90分)の持ち時間のなかで，1,2学期は「核になる教材」として「よく使われる新聞の漢字と熟語」(以下「新聞の漢字」と略す。〔付記〕参照)から1週5ページずつ，3学期は4ページずつの漢字の読み書きの学習(ほとんど自習)をした[7]。聴解は1学期は会話教材「リーとクラークの冒険」[8] の全課の話の展開をチェックする宿題を出し，3学期から「ニュー

7) 「新聞の漢字」で3学期間で学習した漢字は，見出し漢字は731字，漢字熟語数1,732語である。加えて読解教材(精読教材を含む)に現れる漢字と漢字熟語，訓読み語彙を入れると，実質的には目標の1000字を超えると思われる。

8) 「リーとクラークの冒険」(山上明・鶴田庸子著)

スで学ぶ日本語」(以下「ニュースで学ぶ」と略す。〔付記〕参照) から選んだ数課分を聞き取り教材として使用，内容に関するタスク (筆者作成) を宿題としたりディクテーション，クイズといった形で扱った。その他，漢字辞典の使い方指導は1学期目に行った。

第1学期　(秋学期：12週間)

漢字　「新聞の漢字」(1～55ページ)，漢字熟語使用例文，新聞見出し，標識，看板，案内などの読み

聴解　「リーとクラークの冒険」全課の内容チェックの宿題

第2学期　(冬学期：6週間)

漢字　「新聞の漢字」(56～85ページ)，漢字熟語使用例文

読解　新聞記事(飛行機事故，東欧の民主化，ベルリンの壁崩壊など)，TVニュースと関連ある記事やスクリプト

聴解　TVニュース (東欧の民主化関連)，TVドキュメンタリー (東ベルリン市民の買物ツアー)

第3学期　(春学期：12週間)

漢字　「新聞の漢字」(86～133ページ)

読解　新聞記事(天安門事件関連の記事，高校生の株の勉強，日本文学に魅せられ，など)，TVドキュメンタリー「カメラマンの見たニッポン・24時間」

聴解　「ニュースで学ぶ」数課分，TVニュース (中国の民主化関連)，TVドキュメンタリー「カメラマンの見たニッポン」

学生について

16名のうち，日本での生活経験――交換留学生として高校時代の1年を日本で過ごした，日本に住んでいた，日本で仕事をしたことがある，など――をもつもの8名，日本生まれで日本で初級教育を受けた日本国籍のもの2名，日系4名などで，会話力，聴解力，文法力からいえば一部は上級レベル，全体的にも相当のレベルに達していた。しかし，一方で漢字力

は，自己申告で100字を含め300字に満たないものが数名おり，またそれ以上に新聞記事などを読もうという意欲が低いものがかなりいたこともあって，漢字学習への熱意は4,5名を除いて全般に薄かった。

反省と評価

4分の1ぐらいの学生が漢字の学習を苦手とし続けたことに引きずられて読む量が限られ，1学期は新聞の見出し程度しか読めなかった。そのうえ，「核教材」以外の適当な教材——中級向きの記事，広告，パンフレットなど——の準備が不十分であった。1学期に漢字学習とまったく関連のない会話の聴解教材を使ったことはそれなりに意味があったが，漢字学習の定着という点では問題があった。2学期はテレビニュースやドキュメンタリーを使ったが，基礎的な聴解訓練がなければ難しいと考え，3学期になって「ニュースで学ぶ」をはじめて使用した。「読む」ことだけではインプットとして不十分であり，「聴解と読解の関連づけ」の必要なことを確信した。担当時間がテストも入れて週90分と短く，総じて既習の漢字・漢字熟語・語彙を繰り返し扱わないうちに新漢字・新語彙の学習が始まり，定着が十分はかれなかった。学年末の学生からの評価でも，学習した漢字熟語などが他のクラスで十分反復練習できればよかったとの指摘があった[9]のはこの定着不足を指している。学習量が多い中級の段階での定着が課題として残った。しかし，記事の読みに必ずしも意欲的でなかった日系の学生2名からは，帰国後1年たって再来日した際，雑誌など日本語で書かれたものを自力で読むようになり自信がついたとの評価を得た。

B　実践例——2年目(1990～91年)

前年度の反省から導入漢字・語彙の定着をはかるため，学習したものが

9)　精読クラスの読解教材にも漢字や熟語が多く出てくるが，読むもののジャンルの違いなどから，現れる漢字や熟語には相当のズレがあった。

繰り返し現れるよう工夫した。持ち時間が2倍の2コマとなり時間の余裕ができたことと，2年目のため教材の準備がかなり進んだことでインプットの増加と定着がある程度可能になった。読む量を増やす(多読する)ことが不可欠であると考え，そのために，いわゆる生教材からだけでなく広く中級日本語教科書のなかからもできるだけよさそうな読物を集めた。また，1学期のはじめから「ニュースで学ぶ」を「核教材」にして聴解練習をし，耳からのインプットによる定着をめざした。1学期は事件・事故を中心のニュース，2学期は文化・学生関連ニュース，3学期は学生の専攻に関連あるものを中心に取り上げた。この聴解は自習を原則とし，初年度と同じようなタスクを与えた。さらに，文化・文学系の学生の存在も意識して2,3学期は「ニュースで学ぶ」の文化財の流出に関する課に合わせたテレビのドキュメンタリー番組や中級読解教材のなかの人物に合わせたテレビ番組も取り上げてみた。

この年は漢字がある程度入った3学期の半ば以降，新聞などで見つけた興味ある記事の内容について発表するというタスクを学生に課した。少人数の割に学生の専攻や関心がさまざまだったため，自分で読むものを見つけて内容を理解し単語表をつけてくるという学生中心の学習方法を導入した。学生にとってより関心のある「読物」を多くし，同時に口頭表現の指導に結びつけたいという意図からであった。

第1学期

漢字　「新聞の漢字」(1～55ページ)，新聞見出し，書き下ろし使用例の読み練習

読解　中級読解教科書からの読物，新聞記事(聴解教材「ニュースで学ぶ」のトピック関連)，雑誌記事「アルメニアの日本語を話す少年」など

聴解　「ニュースで学ぶ」1～11課(前年度と同じ扱い)と，それと関連のある最新の生のラジオニュース(地震，火事，どろぼうなど)

第2学期

漢字　「新聞の漢字」(56～85ページ)，見出し，湾岸戦争関連の漢字熟語

読解　新聞記事(湾岸戦争関連)

聴解　「ニュースで学ぶ」42, 15, 29, 36, 23課(文化的なトピックと大学生に関係あるもの)，NHKスペシャル「ボストン美術館東洋部の100年」(「ニュースで学ぶ」42課関連)

第3学期

漢字　「新聞の漢字」(86～133ページ)

読解　新聞記事(日本を学ぶ米大学生，など多数)，「経営について」(中級読解教材「中級からの日本語」[10]より)，「ジョン・万次郎」(「日本を読む」[11]より)

聴解　「ニュースで学ぶ」43, 36, 24, 17, 25課(学生の専攻と関連)，「ジョン・万次郎」(テレビ「知ってるつもり?」より)，NHKドキュメンタリー「生まれながらの差別」

発表　「日本の救急システムの問題点」(医学専攻)，「ブッシュ政権の教育改革政策の問題点――日米比較」(国際関係専攻)，「都知事選の分析」(政治学専攻)，「不法就労」(国際関係専攻)，「虚無僧と尺八」(日本文学専攻)など

学生について

この年の学生は10名。国際部の学生総数が前年度より15名も多かったこともあり，J6の上にJ7クラスが設置された。このため，会話力，聴解力など前年度より低い中級であり，文法の復習も必要であった。漢字と漢字熟語が覚えられず漢字学習そのものに苦労する学生も前年度同様何人かいた。しかし，問題意識，知的な関心は全体として前年度より高く，文字

10)「中級からの日本語」(池田重監修)
11)「日本を読む」(氏家研一著)

力・語彙力の割には早くから難しいものを読もうという意欲が高かった。

反省と評価

文法・表現練習にも時間を割き，そのため生教材は思ったほど導入できなかった。当初の目標よりは下回ったが，学習漢字の反復練習を含めた「読解と聴解の関連づけ」，インプットの増加と定着の試みはある程度進めることができた。たとえば，「ニュースで学ぶ」の「地震」の課学習の翌週に大きな地震があり，早速実際のラジオニュースと新聞記事で復習したり，「浮世絵」の課のすぐあとにドキュメンタリー「ボストン美術館東洋部の100年」を見るなど内容の関連づけはかなりできた。しかし，まだ単発的な教材も多く，関連づけのためいっそうの教材収集の必要を感じた。安易なビデオ教材の使用はとかく視覚的な楽しみだけに終わりがちであるが，多技能・多メディア型学習の重要性は，非漢字系学生の漢字学習の場合，特に強調，工夫されるべきであると実感した。少人数のため読んだものや時事的な話題について話す時間も取るよう心がけた。3学期に行った発表については，十分な読みをともなわない安易な発表もあった。3学期には漢字熟語の入りにくい学生の学習意欲を高めるためとインプットを多くするために，各学生の専攻ごとに，覚えたいと言う漢字熟語のリストを用意し，その単語テストも1回行った。専攻が医学1，言語学・日本語1，ビジネス・経済1，国際関係・外交4，日本文学1，政治学2という学生たちがそれぞれ異なる語彙リストを勉強したわけであるが，試験は全員ほとんど満点であった。いい語彙が思うように集まらない分野もあって準備は大変であったが，好評であった。

C　実践例3——3年目(1991～92年)

3年目にあたる今年度は，「核教材」となる「新聞の漢字」と「ニュースで学ぶ」と，1,2年目に集め，使用し，差し替え，補充してきた読物，記事，ビデオ教材，テープ教材とを組み合わせた結果，教材上，技能上より

充実してきた。現在も，数年にわたって使えそうな教材は単に量的に増やすだけでなく，質的な面からも差し替えと補充を行っている。しかし，時事的な問題を扱った過去の教材はまったく役に立たず，使い捨てとなったものも数知れない。前年度までの教材のうち使えるもの半分ぐらいを現在使用中である。前年度に試み始めた「聴解と読解の関連づけ」は，今年もいっそう強力に進めている。2学期からは，初級・初中級の文法の復習の必要を感じ，練習問題を少しずつさせている。たとえば，「時の表現」の復習はビデオ教材のなかの人物の経歴にからめて「内容理解と文法練習の関連づけ」[12] で行っている。

今年度は学生の能力と関心を考慮に入れ，「ニュースの発表」を1学期の途中から実施し，2学期も続けている。

第1学期

漢字　「新聞の漢字」1～55ページ

読解　雑誌記事「アルメニアの日本語を話す少年」，新聞記事「言葉が通じなかった」，「比，ピナツボ火山被災者に吉野屋，古いユニホーム贈る」，「セクシュアル・ハラスメントのアンケート結果まとめて本に」，「ベーカー長官来日」，論説文「歴史の激動の中で迎える日米開戦50年」(石川好)，真珠湾関連記事，中級読物「振り向き賃」(「日本語を楽しく読む本・中級」〔付記〕より)

聴解　「ニュースで学ぶ」1～11課，NHK TV「経済マガジン」より「切札は留学生」，「若者は味噌ぎらい・味噌ジュースの開発」，TVニュース「ピナツボ山噴火被害」「ベーカー長官来日」

発表　「宮沢政権誕生か」，「米トイザラス，日本進出」，「空き缶回収」，

12) 「フェノロサ」のビデオ教材から得られた知識――フェノロサの経歴――から次のような練習を作った。例1) フェノロサは日本に(来る・来た)前，結婚した。例2) フェノロサは(帰国したあと・帰国したとき)離婚した。(このような内容と文法を関連づけた問題の作成と練習の効果についてはいずれ別の機会に発表したい。)

「韓国タクシー」,「ロシアの灯油不足」,「日米学生会議」,「天気予報」,「盆踊り」,「ロシアで米車，売れる」,「自衛隊案内書」など

第2学期　(一部予定)

漢字　「新聞の漢字と熟語」56～85ページ

読解　NHKスペシャル「アーネスト・フェノロサ――日本美術再発見者の素顔」のスクリプト,「握手」(「日本語を楽しく読む本・中級」より), 学生生活や就職に関する統計と記事(「ニュースで学ぶ」関連)

聴解　「ニュースで学ぶ」42, 15, 29, 36, 23課, NHKスペシャル「ボストン美術館」「アーネスト・フェノロサ――日本美術再発見者の素顔」, モースの紹介(「フェノロサ」関連, 筆者口頭説明), 学生生活や就職関係のTVニュースなど

発表　「ソビエト社会主義の崩壊」(新聞論壇),「小学生自殺」(新聞記事),「統計のウソ」(雑誌記事),「国際交流」(新聞記事),「従軍慰安婦問題を授業で扱った高校」(新聞記事)など

第3学期　(予定)

漢字　「新聞の漢字」86～133ページ, 161～174

読解　新聞・雑誌・新書などからの生教材(政治, 環境, 社会, 教育問題など), 中級読解教材から選んだもの, ビデオ教材スクリプト

聴解　「ニュースで学ぶ」より学生の専攻に関連あるもの, ラジオ・TVニュース・TVドキュメンタリーなど

発表　意見や感想をきちんと述べるなど読解教材と関連づけるか, 専攻あるいは関心のあるテーマについての発表

表現　発表を聞いてメモをとり要点を書いてまとめる, 質問を書いて発表者に渡す

学生について

今年度の学生数14名。中国語のできる中国系3名，日本滞在経験1～2年3名，自己申告で既習漢字数100～300字は3人だけであり，ここ3年間でもっとも漢字力のあるクラスである。「日米関係の悪化」という情勢のなかで，政治，経済，ビジネス，文化など広い分野にわたって日本を知ることへの意欲が強い学生がかなりおり，これまでのところ取り上げるテーマには事欠かなかった。

反省と評価

今年度，漢字と熟語の定着は2学期の精読クラスの読解教材との関連づけでさらに高められつつある。関連するテーマが読物とビデオで扱われるなど，教材的にもより充実してきているといえよう。学生による発表は昨年度よりはるかにきちんと準備されて行われ，しかも，2学期目(つまり2度目)の発表では使用語彙・表現の面で格段の進歩を示した学生がおり期待がもてる。このように1学期にかなり低かった口頭表現の力と意欲も伸びつつあるが，語彙力がついてきただけに表現力の不足が目立ち，表現技能の指導が不十分だったことを痛感している。

III. 中級教育の構築

1) 効果的な中級漢字・語彙教育

以上の実践から，中級段階の漢字・語彙教育がもっとも効果的に行われる要件を次にまとめてみる。

1 多読させる

漢字・漢字熟語・語彙教育はしっかりした読みをともなわなければならない。初年度の実践例が示すように，読みを十分にともなわない漢字・語彙教育は定着も悪く，漢字学習の動機も到達感も薄れる。中級の前期から中期にかけての学生には学習した漢字・語彙が適当に入り興味をそそる教材を多く読ませる必要がある。

2　多種多様な教材を組み合わせる

A　漢字「核教材」――頻度の高い漢字熟語を中心に漢字を導入する教材――の必要

B　中級「多読」用読解教材――速く多く読めるおもしろい読物――の必要

読解力が低ければ低いほど中身につられて読み進んでいけるような教材が望ましい。こうした教材が多く用意されていれば知らず知らず多読をすることになる。

C　生教材――新聞・雑誌記事，本の文章，広告，書類など――の必要

学習した漢字熟語が生教材のなかにいくつも発見できれば学習動機が高まり到達感が得られる。学習したことが役に立つという実感を得られることが重要である。特に国際部のように留学期間が10か月ほどしかない場合，学生は現実の日本への関心の高さから背伸びしても生あるいは生に近い教材を求めるものである。生教材が読めるようになれば，それが知的な関心をさらに刺激し学習意欲が高まっていくことになる。

D　視聴覚教材――学習漢字熟語・語彙が多く入ったニュース，トピックス，ドキュメンタリーなど――の必要

3　技能別学習を相互に関連づける

中上級段階では技能別や内容別クラス――精読クラス，速読クラス，聴解クラス，漢字クラス，表現クラスなど――が置かれることが多いが，中級の場合，カリキュラム上このようなクラスを設けただけでは効果的とはいえない。非漢字系で漢字学習の負担が大きい学生にたいしては特に，あるテーマについて読み，書き，聞き，話し，その技能をたがいに関連づけていくことが必要である。

2)　新カリキュラムのもとでの中級コース

国際部では30年近く続いたカリキュラム――90分授業を1日1コマず

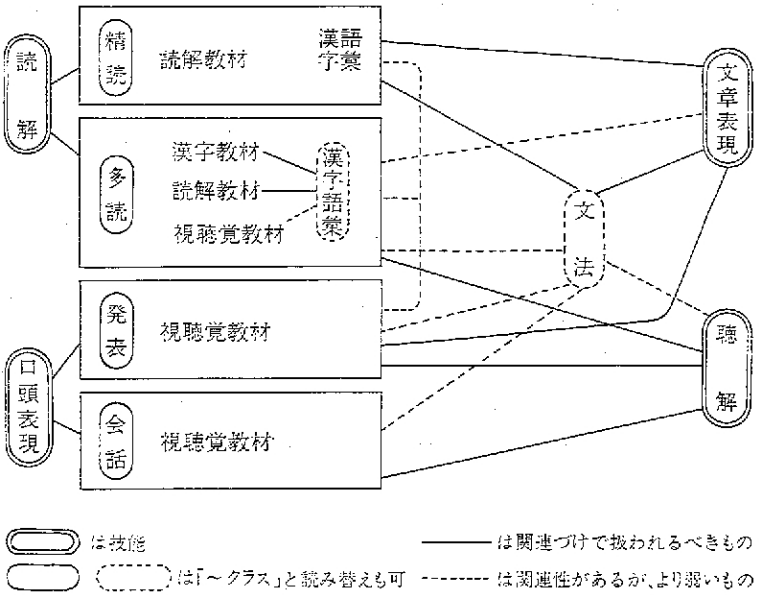
つ，週に5日——を1992年9月の新学期から，月，火，木，金の4日間，45分授業を3コマずつ行うことになった。待望の90分授業からの解放である。

45分授業の実現は，個々の教師の授業計画を当然変えていくであろうが，統合的な教育の実現を可能にするものとしてカリキュラム全体にも積極的に生かしていきたい。ひとつひとつの技能の指導がどれほど自己完結的に優れて行われても統合的な意味をもたなければ，コース全体での教育効果はあるレベルにとどまってしまうのではないかと思う。さいわい国際部では，1日の授業をひとりの教師が担当し，原則として月，火，あるいは木，金のように同じ教師が2日続きで教えることになっている。つまり，1コマ45分を1日3コマ，2日で6コマ教えるわけである。これは現行のカリキュラムに比べ技能の統合，有機的な授業の組み合せをはるかに効果的にするであろう。

一般に中級段階の教育では，聴解クラスを例にとっても，何の聴解指導が必要かという点は軽視されがちであり，まして他の技能——読解——と結び付けて指導されることはほとんどない。さらに，聴解はあっても口頭表現——発表と会話——の指導が看過されることも多いようである。これらのことから，中級に必要なすべての技能とそれらがどう関連し合っているか，中級段階における諸技能の有機的な組み立ての可能性を示す図（次ページ）を作成してみた。実際のシラバス作成の際の参考となろう。

国際部では従来，中級，初中級ともプリント教材がほとんどで，担当教師が変われば教材も授業内容も一変するのが普通であった。担当教師に合った教材が使われることでよりよい授業ができるという積極的な意味も認められるが，よい教材を蓄積していくという発想に欠けていた。また，筆者の2年半の経験でも学生の技能上の弱点などは年度によって相当異なっていたが，個々の教師中心でシラバスを組み立て何の指導がより必要であるかということが配慮されないきらいがあった。今後は年ごと，あるいは学期ごとの中級クラスの教案に，これらの点も考慮に入れていきたいと思う。

中級コースの構成要素とその関連図



参考文献

1. K・ジョンソン / K モロウ編著　小笠原八重子訳「コミュニカティブ・アプローチと英語教育」桐原書店　1984
2. 岡野喜美子「国際部の初級日本語教育――現状と将来への展望――」『講座日本語教育』第 24 分冊　早稲田大学日本語研究教育センター　1989
3. 牧野成一「ACTFL 言語能力基準とアメリカにおける日本語教育」『日本語教育』61 号　1987
4. 「日本語教育ハンドブック」『第 3 章　教授法(木村宗男編) 4』日本語教育学会
5. 北條淳子「中級における文型とその指導」『講座日本語教育』第 21 分冊　早稲田大学日本語研究教育センター　1985
6. 川口義一「中級クラスの速読指導」『講座日本語教育』第 26 分冊　早稲田大学日本語研究教育センター　1991
7. 河野玉姫「中上級の学習者　特に非漢字圏学習者のための漢字教育」『紀要』14 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター　1991
8. 坂本恵「中上級における音声言語指導」『講座日本語教育』第 26 分冊　早稲田大学日本語研究教育センター　1991
9. 市川智子「上級聴解クラスにおけるテレビ報道番組ビデオの利用――米国国務省日本語研修所の場合――」『日本語教育』73 号　1991

10. 上山民栄「アメリカの大学における日本語「上級」の問題点と提案」『日本語教育』71号 1990

〔付記〕使用教材解題

以下，よく知られている教材ではあるが，あえて，改訂あるいは今後の教材開発の参考となるよう使用者の立場から意見を述べる。

◎ 「よく使われる新聞の漢字と熟語」(豊田豊子著)
使用頻度の高い漢字熟語と基礎語彙が入っているので，早く新聞などが読めるようになりたいという学生によい。初級の漢字の学習の仕方と異なり，漢字の意味，書き順，字義など自習が必要となるので，自然に辞書を多用するようになる。使用者からすると頻度順索引が欲しいし使用例ももう1例ぐらい欲しい。使用例にルビがあれば(あるいは録音テープがあれば)例文の自習がもっとやりやすくなるだろう。

◎ 「ニュースで学ぶ日本語」(堀歌子・三井豊子・森松映子著)
テープで繰り返しニュースの聴解練習ができる。いろいろなトピックが入っている。使用者からすると，その時々の現実のニュースにまさる教材はないが，格好の生のニュースを探しきれないときに，「核教材」としての利用法がある。できれば同種のトピック(例えば，社会問題，社会現象，事件，事故，文化，スポーツなど)がいくつかずつあると選択できてよい。ニュースは数年ごとに新しくしていく必要がある。こういう教材は，理想的には常に新たに採用したり差し替えたりしながら備えておくべきものであろう。単語表は学習者の知識の程度によって，練習問題は教師の工夫によっていくらでもつけられるので素材が豊富にあれば十分である。

◎ 「日本語を楽しく読む本・中級」(産能短期大学日本語教育研究室編)
ここにある文章を読む学生の表情を見ていると熱中しているのが分かる。多読用教材として評価できる。こういう教材の作成は，内容がおもしろくよい読物を集める目と努力があってはじめて可能である。練習問題もそれぞれの素材を生かしコミュニカティブ・アプローチにもとづいて作ってある。続編が望まれる教材である。